審 査 結 果 の 要 旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

本論文は、我が国で学校における音楽科教育が始まって以来、約140年の間等閑視されてきた、「合唱本来の学び」を得るための指導理論を確立することを目指したものである。今日、学校教育における合唱は、音楽科教育において中核的、中心的役割を果たしているにもかかわらず、社会で扱われている「芸術文化」としての合唱音楽とは一線を画すものであり、音楽そのものを学ぶことよりも、連帯意識を育み、一体感を味わうといった「手段としての音楽教育」として扱われてきた。合唱を「音楽活動」として捉え、「音楽の学び」を成立させるためには、獲得しなければならない技能や学習すべき内容が他の教科同様に存在する。単に声を合わせて一所懸命歌うだけでは声は融け合わず、ハーモニーも生まれない。しかしながら、学習指導要領において、合唱の学習内容は欠如しており、関連する指導指針や解説書においても指導理論は見当たらず、今日まで現場の教師の経験や勘に頼る以外方法はなかった。本論文は、これらを問題背景として、 合唱授業の学びの本質から指導理論を構築するために、授業を現象面から科学的に分析し、歌唱学習のプロセスにおける特質とメカニズム、特に児童・生徒が教師の声を模倣する「声の相似現象」を起点として、合唱指導法を構築すると共に、理論に裏付けられた指導実践から指導法の有効・有用性を検証したものである。

冒頭で述べたように、本論文は、これまでほとんど手がつけられてこなかった学校教育における合唱指導理論を確立することを目指した、我が国では最初の包括的な研究である。筆者は、中学校教諭として２０年勤務し、また我が国でも有数な合唱団の指揮者でもある。学校教育と合唱の両分野に精通している者だけが取り組むことができるテーマであり、極めて重要かつ独創的な研究であると言える。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文は、①合唱授業の学びの本質から指導理論を構築すること、②授業を現象面から科学的に分析し、歌唱学習のプロセスにおける特質とメカニズムを明確にすることから、合唱指導法を再考すること、③理論に裏付けられた指導実践から指導法の有効・有用性を検証することの３点を目的とし、それぞれに異なる研究方法を用いている。①の目的については、内外の膨大な先行研究を踏まえて合唱および合唱指導に関する我が国及び世界の動向を網羅し、現時点での合唱指導理論を集約した。②については、歌唱指導において、児童・生徒が教師の声を模倣する「声の相似現象」に着目し、機器による様々な音声分析を用いて、そのメカニズムを科学的に実証し、合唱における「模倣理論」として、オリジナルな合唱指導理論を導き出した。③の目的については、①および②で得られた２つの指導理論が、実際の授業においてどう作用し、どれくらい有効、有用なのかについて、12の指導実践の詳細な分析を行い、リアルな授業における本理論の適用可能性を検証した。本研究は、教育実践のための理論を構築するという、極めて複雑かつ困難な課題に対して、多角的な研究手法を用いた総合的かつ包括的なアプローチにより解決を目指しており、「広域科学としての教科教育学」研究として妥当と判断できる。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

声の相似現象についての音声分析については、音声生理学の専門学者の助言のもと、当該分野の手法に従って、母音、音高、音の時間的経過、音の強さ、子音のタイミング、静止音や破裂音の音響的特徴の諸項目において、ピッチ分析、フォルマント分析、サウンドスペクトログラフ、スペクトログラムを用いて解析している。その結果、マンツーマンにおける歌唱時も集団歌唱時いずれの場合も、ピッチ、音の立ち上がり、時間経過、音の移行、音圧に共通点が見られるが、音色においては違いが認められるなど、歌唱における相似現象についての正確かつ詳細な成果を得た。また、実践授業の分析においては、合唱に不可欠な５つの能力（音程感覚の育成、倍音の学習、聴感の育成、音楽構造分析、発達段階の考慮）の獲得を目指して行われ、模倣理論と指導理論がどのように関連しているのか、実際の授業状況の中で精緻な分析が行われた。

（４）研究の考察と結論が妥当であり，学術的な水準に達しているか

学校教育における包括的な合唱指導理論を構築するために、合唱に必要な能力を整理し（第１章）、児童・生徒の音楽能力の発達段階を踏まえ（第２章）、歌唱学習における相似現象の検証とそれに基づく指導理論を析出し（第３章）、国内外の授業における合唱指導システムを総括した（第４章）後、教育実践の場における理論の有効性・有用性を検証する（第５章）という論文構成は論理的かつ合理的な展開である。各章間は有機的に連携し、（１）歌唱授業では模倣行動を起点とした相似現象が見られること、（２）学習指導要領でこれまで欠落していた合唱指導のための基礎理論は効果があり、応用可能であること、（３）理論に裏付けられた合唱指導は不可欠であること、という結論を導き出し、教師はこれらを把握・理解して授業を行う必要性を示唆した。これら一連の考察は、すでに述べた妥当で適正な研究方法と緻密な実践分析に裏付けられ、学術的に高い水準にある研究と判断できる。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論考により導き出された結論は、説得力に富むだけでなく、学校教育現場全体の合唱実践の在り方を再考し、変革を促すものである。ともすれば非受験教科として軽視されてきた音楽科を、情操教育のための手段としてではなく、音楽そのものによる深い学びを通して、社会と人間を理解し、学校教育で最重要な教科として捉え直すための一つのアプローチとして期待できるものである。以上の一連の評価より、5名の審査委員は全員一致で、本学位論文が東京学芸大学教育学研究科の博士（教育学）の学位にふさわしいものと認め、合格であると判定した。